

迎撃戦と本土決戦に備えた四式戦

滋賀県 佐野 岩男

昭和十九（一九四四）年四月、第一期特別幹部候補生として中部第九十八部隊第二中隊に入隊する。隊長は岩手県出身の齒科医の田鎖中尉であった。部隊は十二個中隊で編成されていたと記憶する。編成は中隊ごとに航空機の機種別になっていた。第二中隊と第五中隊が戦闘機で、候補生合格時に甲（機関）乙丙丁と専科を指名され、それぞれの中隊に配属された。

太平洋戦争は陸・海上戦を主戦場としていたが、南太平洋において敵の航空部隊に惨々痛めつけら

れ、海上兵力の主力まで失う羽目となった。

そこで急遽、航空兵力の増強を企図し、特に航空戦闘兵力の増強が急務中の急務であった陸軍では、操縦士二万人の確保命令に基づき、各専科要員の急増強の制度として特別操縦見習士官（学徒兵）及び少年飛行兵の充足のため特別幹部候補生制度を設定し、併せて船舶兵と戦車兵にも特別幹部候補生制度が発足した。何れも一機、一船の長（下士官）要員の充足であった。

とは言え、少年兵に短期で現役兵並みの訓練をするということに部隊としては相当神経を使ったと思われる。その配慮は当時の部隊長（少将）が入隊者の父兄宛に送られた文書で分かると思う。以下全文を引用する。

父兄に対する希望事項 松井隊長

従来軍隊家庭間ノ連絡不十分ナル為、屢事故発生或ハ健康上無理ヲ来ス者ト有之候状況ニ鑑ミ、将来教育ノ資料ニ供シ指導ニ満全ヲ期シ度希望致候間、左記事項危惧ナク速報被下度候

左記

- 一、入隊前ニ於ケル本人ノ性格特ニ長所短所並びニ特有ナルモノ
- 二、入隊前ニ於ケル本人ノ病氣（病名何歳時治愈期間）並ニ家族ノ健康状態
- 三、血族関係ニシテ死亡シタル者ノ病名並ニ現在罹病中ノ病名
- 四、面会ニ就イテハ時局下輸送機関繁雜ナル折柄事情止ムヲ得ザルノ外努メテ遠慮サレ度面会時ハ特ニ防諜ニ触レナキ様（書簡同封煙草）小遣錢トシテ金錢ヲ授与スルガ如キハ種々事故ヲ若起スル等ノ弊害アルヲ以テ固ク差控ヘラレ度追而食物一切持込禁止シテアルニ付為念

- 五、子弟ノ為ニ送付セラル慰問品類ハ本人修養ニ兎角弊害アルニ付一切遠慮サレ度、尚亦部隊古参兵以上ニ対シ謝礼慰問ノ意味ヲ以テスル一切ノ物品金錢ノ贈与等固ク厳禁ス
- 六、其二他子弟ノ教育指導ニ参考トナルベク思考サレル事項ハ詳細ニ通報セラレ度

こうして期待された特幹一期生も、七月下旬には初年兵としての全教程、訓練を終え、第一期の検閲を受けるようになる。中隊、部隊の検閲を終え師団検閲の予定であったが、突然の転属命令で東北盛岡市の第四航空教育隊に転属する。この部隊は新設教育隊であったが訓練施設、機器も全く見当らず、連日普通教育訓練に明け暮れる日が続く内に、一部隊員の転属が何回かあったのは九月初旬頃であった。

中旬に自分達にも転属命令が出る。行先の明示もないまま盛岡駅の上り列車で出発する。二日後到着した部隊が東部第三百三十三部隊であった。休む暇もなく班編成、幹部の紹介と名前を覚え

るのが精一杯であった。到着日は今までにない豊かな食事に皆面くらっていたが、二三日してから「キ八四（疾風）」の機関整備が任務であることと知られると共に、機関整備教程の配布を受ける。当時軍部は「キ八四」を太平洋戦争の決戦機と位置付けていた。そのことは試作機が百三十機以上に上ることでも分かる（通常試作機は多くて二十機までであった）。

軍部が大きな期待を掛けて採用した戦闘機のエンジン整備要員であることに不安が先立ったのは、戦友も同じ思いであったと思う。

連日教程を抱えての整備演習には食事の味も分らない日が続く。ようやく試運転が出来るようになった頃には関東地方にB 29が飛来して来た頃であった。機付長の下三〜四人で二機の整備を担当するようになったのは十一月も半ばも過ぎた頃であったと思う。以後、操縦学生の練成訓練にほとんど連日飛行した機も、防空警報の発令時は即迎撃出動に備えて万全を期するため深夜まで点

検整備する日が重なるようになる。

今まで少数機で来襲して来たB 29が、三月初旬には大編隊で来襲するようになる。三月九日には三百九十機の大編隊で東京都を無差別爆撃する。夜間、探照灯に照らされた飛行機に向け発射する高射砲弾がとどかないため音と爆撃の炸裂音のみであり、大地の飛行場に立つ我々もただ地団駄を踏むだけで、悔しさだけが先立つ無念さは生涯忘れることの出来ない日々であった。

今までグアム島を発進基地としていたB 29に加え、奪取した硫黄島を基地とする米戦闘機ムスタングP 51の来襲が多くなる。海上の母艦からのグラマンに加えての急襲に、飛行訓練もままならない日が続く。

硫黄島を奪取した米軍は連日のように関東方面の軍需施設を目標に来襲する。敵機の来襲に備え、格納庫の解体と共に、兵舎及び関係建物も全て解体が進む。飛行機は場外周辺の桑畑に造られた掩体格納となり、兵員は相模川沿いの松林に解体し

た材料で造られた参角兵舎での住まいとなる。この頃から操縦訓練は急降下、急上昇の訓練が主体となる。

いつ頃からであったか訓練の充実を計るため、相模湾に海軍の協力を得て艦船への突入訓練が始められていた。この頃には顔見知りの飛行兵がいつとなく見られなくなると、彼等も特命だろうと灯火（ローソク）の元で話合いの日が続く。戦況は本土決戦に迫られているのではと不安がのぞくのであった。沖繩の戦況は全く分からなかったが、時折飛行機受領や連絡で来隊する部隊出身操縦士が、「特攻隊直援に二〜三度出撃すると自分も共に突つ込みたくなる」と直援機の辛さを話すこともしばしばであった。（直援機は援護した編隊の戦果を、発進基地の隊長に報告することが使命であった）。

敵が攻撃する弾幕を潜り抜け帰隊するのは容易ではない。自ら突入する機も数多く、必死の操縦で海上三十〜四十メートルを最速で脱け出して来

た操縦士は「四式戦だから出来た操法であり、他の機種では到底出来なかっただろう」と四式戦の優秀さを讃えていた言葉が頭に残る。

〔掩体格納の辛さ〕

掩体格納の愛機を飛行場まで出し入れするには、施設隊員と僚機の機付兵の援助を得なければ、誘導路で車輪が落ち込み前進することが出来ない。このような事態を予期してか関係者に指示がされていた。ようやく飛行場へ出し試運転の途中で空襲警報の発令で急遽飛行場の片隅へ退避させるのである。

沖繩に米軍の上陸と合わせたように、関東方面の軍需施設への来襲頻度は多くなり、飛行訓練にも相当支障を来していた。米軍機の来襲に呼応して迎撃に出撃することが度重なり、被弾した機体の整備に徹夜の時も度々となる。主に迎撃と訓練が重なる日も当然のことのようになり、機関整備、被弾箇所補修、部品の交換等は時に瞬く間に過ぎ、昼夜連続の整備が続く時等は覚醒剤を貰い、

作業を続ける日も幾度かあった。

掩体格納が常駐となり、朝は三角兵舎から掩体格納機への直行が当然の日課となる。この頃になると米軍艦の艦載機グラマンと硫黄島から発進して来たムスタングP 51が交互に、突然飛行場を襲撃するようになる。警報は来襲と同時になることも度々であった。

掩体からの部品の調達は飛行場を横断し往復しなければならぬ。途中で敵機の襲撃に会いシユシュウと地上に落ちて来る弾は左手二十センチ位か、立ち上がり急ぎ掩体へ、そして機体の無事にホットする。敵機の来襲が激しくなると食事も届かない日が多くなる。整備の合間に周囲の畑より馬鈴薯を頂戴し、掩体壕で蒸し、代用食とすることが多くなる。この頃になるとムスタングP 51が空中炸裂弾(ナパーム弾)を投下するようになる。地上八十メートルで爆発し、破片は刃物のよう機体に当たると切り裂いたような損傷を受ける。

六月半ば頃と思うが、掩体で田中君と整備点検

う。

平穏な日は灯火の元でその日の出来事を話合っている中に、「ドーン、ドーン」と艦砲射撃の音が聞こえて来る。「浜松辺りであろうか」と話合いながら明日の作業と敵機の来襲に備えての行動を打ち合わせしばらくの眠りに就く。こうした日が幾日か過ぎた頃、広島に新型爆弾が投下されたらしいと今井兵長(特幹同期)より聞く。同じく藤井君は理研の八木博士が研究していた殺人光線と同じような物ではないかと話ながらお互いに気力の無い姿が目に残る。

その日以後、通常通りの作業を続けていた数日後、広島と同じ爆弾が長崎に投下されたことを知り、互いに意気消沈の姿が目につくようになる。

十三日の午前に、いよいよ降伏らしいとの噂が誰からともなく伝わる。二日後正服で集合するようにとの命令伝達があり、急ぎ農家の庭に集合する。内容は分からないが全面降伏の玉音放送であることを知らされる。当日はにわか増配された

を終え、試運転に入り、最高回転にレバーを引いた途端に「止める！」の大声にレバーを戻し、操縦席を飛び出す。途端に、破片が当る音がした。退避後、操縦席へ戻ると破片がその席に、大きさ五、六センチ位だった。丁度、操縦席で左大腿部当りに止まっていた。間一髪で難を逃れた自分に、戦友の田中君が「お前はとことん運の強い奴だ」と感嘆していた。

その頃より警報発令が出て何故か出撃命令が出なくなる。後で本土決戦に備えて稼働戦闘機は全て残留保護の命令が出ていたという。

機付長もいなくなつて一カ月近く過ぎていたが、整備隊長、機付長から何等の命令もなく、機付長の任務を田中君と二人で全うしていた。沖縄本島が玉砕したとの報を本部通信兵の上島兵長より聞き、いよいよ本土決戦が近いことが身近に聞こえてくる。操縦士は総て特別攻撃隊に編成され(待機特別攻撃隊・振武一七五〇一七八隊)に編成されていることを知ったのは八月初め頃だったと思

食料に、エタノールを持ち出して飲んで自暴自棄になる者等があり、誰も收拾する者もなく夜が更ける。

翌日、早朝より厚木海軍航空隊の「雷電」二機が飛来し、「全面降伏は嘘だ。我々と共に行動するよう」呼び掛けに来る。少飛の人達と我々はピラの積み込みや印刷を手伝うことになる(いわゆる、小園安名大佐を長とする厚木航空隊の反乱軍である)。

部隊長は「決して軽挙妄動してはならない、行動する時は皆一緒に行動するのだ」と注意されたと聞く。この事で、初めは召集兵等から帰郷させる予定を急遽若い兵士を先に帰らせる処置が採られたようである。

八月十八日、中津よりトラックで小田原駅まで送り届けられ、それからは荷物並みの客車に乗って田中君と共に帰郷する。二十日深夜に草津駅に着いたと思う。この列車は軍人だけの専用列車で陸・海・空の軍服姿で軍刀等を所持する人もいた。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十九年四月、第一期特別幹部候補生として中部第九十八部隊第二中隊に入隊した。

この特別幹部候補生制度は特別操縦見習士官（学徒兵）及び少年飛行兵の充足のために設定されたもので、一期生も七月下旬には初年兵としての全教程、訓練を終えて検閲を受け、盛岡の第四航空教育隊に転属する。

この部隊は新設教育隊であったが訓練施設、機器はなく、連日普通教育訓練に明け暮れる。そして九月初旬頃、東部第三百二十三部隊に転属となる。

この部隊は、「キ八四（疾風）」の機関整備が任務であった。当時「キ八四」は太平洋戦争の決戦機と位置付け、試作機でも百三十機以上上ったといわれる。

この「キ八四」の試作は昭和十七年四月に中島飛行機に指示され、速度と上昇力が重視される重戦に対して、軽戦の長所である運動性と航続力を

加味することが要求されていた。試作一号機は昭和十八年三月に完成したが制式決定にはならず、ようやく四式戦闘機として制定されたのは昭和十九年四月であったという。

ちょうど、体験記執筆者が東部第三百二十三部隊に転属となり、基幹整備の任務に着いた時と符合している。

本機の空戦性能は、二式戦よりははるかに優れ、三式戦よりはやや劣る程度で、高速度を考慮すれば優秀な飛行機と言えたが、ただ、操縦性と整備性にはやや難点があったと言われる。しかし体験記執筆者が語るように、軍は太平洋戦争の決戦機と位置付けていたことが領け、また連日教程を抱えての整備演習には寝食を忘れて努力したことが記録されている。

マリアナ基地B 29の本土空襲は、昭和十九年十一月一日、関東方面に二機の偵察に飛来したのに始まるが、同月二十四日、約七十機の東京空襲から本格的な空襲が開始された。当時の空襲は主と

して東京付近の工場地帯に、一部は東海地区にも及びつつあった時で、翌年二月までには延べ千百機の多くの来襲が記録されている。それまで中国大陸から来襲していたB 29は、一月よりマリアナ基地に転進しつつあって、三月からはマリアナ基地からの飛来が本格化し、がぜん来襲回数、延べ機数とも増加した。

体験記執筆者も「それまで少数機で来襲したB 29が、三月初旬には大編隊で来襲するようになり、夜間、探照灯に照らされた飛行機に向け発射する高射砲弾が届かないため、音と爆撃の炸裂音のみであり、大地の飛行場に立つ我々もただ地団駄を踏む、悔しだけが先立つ無念さ」を記録する。

また、新たに占領した硫黄島を基地とする米戦闘機ムスタングP 51の来襲も多くなり、航空母艦からのグラマンが加わり、基地での飛行訓練もままならない日が続いたという。

その「キ八四」の練成訓練には当時の少飛行第十五期生が第一練成飛行隊での練成、四式戦闘機

への搭乗訓練を受けるために入隊していた。

敵の弾幕を潜り抜け、海上三十〜四十メートルを最速で脱け出し、四式戦の優秀さを讃えていた戦友の言葉をも紹介している。